

とサルとの共通抗原性が示唆された。

サルリンパ球の培養より3株の系が得られ、1株は表面免疫グロブリンを有せず、Eロゼット形成率87.6%でT細胞系と考えられ、2株はEロゼットを形成せず、表面免疫グロブリンを88.0%、86.0%有することからB細胞系と思われる。

箕面A集団の音声量の測定

吉田 敦也 (阪大・人間科学)

本研究は大阪府箕面市箕面山に生息する箕面A集団について、(1)集団成員の性・年齢・順位によって音声の発声頻度(音声量)に違いがあるのか、(2)集団成員の音声量は一日を通じてどのような変化をするのか、という2点を明らかにしようとするものである。その主たる理由としては、(1)これまでのニホンザル音声の研究が各種音声の記述と分類に重点を置いていたこと、(2)ニホンザルの音声活動は集団によって若干ではあるが異なっていると考えられていること、等が挙げられる。従ってこうした研究は、それ本来の目的に加えて、ある特定のニホンザル集団の特性を知る上での一つの手がかりとなると同時に、その集団における各種の音声研究の基礎となるものと考えられる。

方法は、箕面A集団の成員241頭の中から、成体(10才以上)、準成体(5才～9才)、未成体(4才以下)の3つの年齢区分について、高順位オス、メス各3頭、低順位オス、メス各3頭の合計36頭を被験体として選択し、(1)朝の移動時、(2)給餌前、(3)給餌中、(4)昼の休息時、(5)夕方の移動時、の5つの事態において、それぞれの被験体について各15分間音声の録音を行なうというものである。

結果は、餌付け集団とはいえ山中での追跡録音が予想以上に困難であったため、補足的な被験体21頭の資料を含めた約30時間の録音についてまず分析した。それによると、(1)箕面集団の成員によって発せられる音声の大部分は、いわゆる coo サウンドであること、(2)未成体が成体、準成体に比べはるかに音声量が多いこと、(3)オスはメスに比べて音声量が少ないこと、(4)成体メスに関しては、高順位個体の方が音声量が少ない傾向にあること、等が明らかとなった。事態による音声量の

違いについては、給餌直前および給餌中を除いては、夕方の移動時に特に音声量が多いことが判明した。

チンパンジーの選択行動におけるカテゴリー化とラベリング効果の分析

小島 哲也 (信州大学・教育)

本研究は、視覚性人工語により色、形、あるいは数の命名や理解が可能なチンパンジーにおいてラベルの使用が弁別行動にどのような影響を与えるのかを実験的に分析する目的で行なわれた。実験は、予備訓練の後、昭和57年6月末から8月中旬にかけて研究所地下チンパンジー用ホームケージエリアで実施された。

予備訓練では、①チンパンジーの人工語学習場面をコンピュータ制御下実験室内からホームケージへ拡大する、②刺激のカテゴリー化が要求される弁別学習を形成する、③習得済みのラベル使用(命名)反応を簡易キーボードへ一般化させる、ことを目的とした。4頭のチンパンジーの各々に、色と形で異なる品物群の中から特定の品物(ターゲット)を選択する弁別課題を訓練した。容器の中から品物を1個ずつ選び実験者に手渡しさせ、ターゲットの選択反応だけを強化する手続きにより、変動するターゲットを正確かつ迅速に選択(カテゴリー化)できるようになった。内2頭には簡易キーボードを用いて、自らが選択した品物の色や形を命名する訓練を行なった。

実験では、雌(アイ)1頭において、弁別課題場面へ簡易キーボードを持ち込み、弁別行動におけるカテゴリー化に命名反応の与える影響を分析した。実験Ⅰでは、選択反応後に品物の色や形の命名を行なう(labelling)条件と行なわない(choice)条件とでカテゴリー化の速さを比較し、命名反応によるカテゴリー化への促進効果を認めた。実験Ⅱでは、命名の刺激次元がターゲットの刺激次元と同じ(compatible labelling)条件と異なる(incompatible labelling)条件とでカテゴリー化の速さを比較し、非ターゲット次元の命名反応によるカテゴリー化への妨害効果が認められた。

以上の結果は、弁別行動におけるカテゴリー化への命名反応による刺激統制の事実を示しており